自立支援コース

●自立支援コースの成り立ちと現状

知的障がい生徒自立支援コースは、障がいの有無に関わらず、中学校と同じように高校でも地域の仲間とともに学びたいという当事者たちの願いを受け、「ともに学びともに育つ」の理念のもと2001年に調査研究校4校（西成高校・柴島高校・松原高校・阿武野高校）が指定されました。2003年には園芸高校が加わり、5年間の調査研究を終えた2006年に貝塚高校を含め9校（上記に加え、枚方なぎさ・八尾翠翔・堺東）の府立高校に自立支援コースが設置され、本格的なスタートを迎えました。本格実施から今年で15年目を迎えますが、各校日々の学校生活の中で「ともに学びともに育つ」教育の実現に向けて試行錯誤を繰り返しています。

また、就労に重点を置いたカリキュラムを実施する高等支援学校を本校とする共生推進教室も、2006年の枚岡樟風高校を始まりに徐々に設置校が増えていき、現在では府立高校10校まで広がりを見せています。同じく「ともに学びともに育つ」教育を掲げ、大きな役割を担っています。

大阪府では現在、支援学校の中学部及び中学校の支援学級で約3500人の生徒が学んでいます。ここ10年間で、全国の支援学級在籍者数が約2.5倍に増加している一方で、受け皿が劇的に広くなったかといえば、そうではありません。地域の支援学校、高等支援学校、自立支援コース・共生推進教室設置校以外の学校にも様々な障がいにより配慮を要する生徒は多数進学しており、どの学校においても支援教育の考え方は一層重要になってきているように感じます。

●貝塚高校自立支援コースの10年間

貝塚高校ではこの10年間、設置当初の思いを引き継ぎつつも、より良い学びの場の構築を目指して、授業体制や評価方法の工夫、進路開拓、課外活動への参加等を進めてきました。

その中でも、2018年度入学の15期生から定員が各学年4名になったこと、クラス数の減少に伴う教員定数の削減を受けて2人担任制が廃止されたことは生徒にとっても、教員にとっても大きな変化であったと思います。今までと同じことが物理的に難しくなるからこそ、これを機に、これからの貝塚高校は何を目指していくのか（何を引き継ぎ、何を変えていくのか、そしてそれは持続可能なのか）を学校全体で考える時期に差し掛かっているのではないでしょうか。

●授業・課外活動

授業は以下の3つの形態で行っています。

① クラスで一緒に受ける（入り込みサポートあり）
② クラスで一緒に受ける（入り込みサポートなし）
③ 個別・小集団授業（原則自立支援コース生のみ）

それぞれの教科・科目で、これまでの蓄積を活かしながら、その生徒の特性に応じたサポートを行っています。入り込みサポートのある授業は、自立支援コースのひとつの形として、貝塚高校に定着しているように感じます。最近では、自立支援コース生が選択できる科目の数も増えました。ここまで選択肢が広がったのは、各教科の先生方の日頃の実践の成果であると、感謝しています。

また、今年度からライフデザインを自立支援コース以外の生徒も受講できるようになりました。障がいによ

クラスの友だちとカレーパーティ

部活動での様子

フライングディスク講習会

り配慮を要する生徒への支援が各校で課題となっている中、貝塚高校として一歩前に進むことができたのではないかと思います。

課外活動に目を移すと、ここ数年は積極的に部活動に参加する生徒も多く、部活でキャプテンや部長を務める生徒も少なくありません。普段の授業や、※注1インフィニティの中とは違った学びを経験できる場として大きな役割を果たしています。

インフィニティサークルではフライングディスク大会への参加や講習会の開催に加え、新入生歓迎会やサマースクール、秋の遠足、クリスマス会、3年生を送る会などを生徒中心に様々な行事を企画・運営しています。また、自立支援コースのオープンスクールでの学校紹介や、人権文化発表交流会での舞台発表には毎年参加しています。他の部活と掛け持ちしている生徒にとっては年中大忙しのスケジュールですが、クラスとは違った自分を表現したり、インフィニティルームがホッと一息つける居場所となっていたりと、自立支援コース生にとって大切な時間となっています。

※注1　インフィニティとは自立支援コースの愛称です。

●進路指導

これまで総合学科3期生（自立支援コース1期生）～14期生まで計33人の生徒が卒業しました。卒業生の多くはそれぞれの就労先（もしくは転職先）で定着しているようで、うれしく思います。

70周年の寄稿では「進路指導」「就労先の開拓」が課題として挙げられていました。それ以降、歴代の自立支援コーディネーターの先生方を中心に、非常に体系的に実習指導を形づくられました。それと並行して、実習先は生徒の興味関心・適性に合わせた企業を毎年、新規開拓し続けています。1年次で進路意識を育み、2年次で職種・業種の異なる実習を3回経験し、3年次で卒業後の就労・定着に向けてマッチングを行う流れは、積極的な職場開拓が根底にあるのだと強く思います。

これまでの卒業生33名の内、偶然ではありますが、同じ企業に就職した例は1つもありません。定員が4名となり、職場開拓にかかるエネルギーも大きくなっていますが、これからも「定着を見据えた就労先」「その生徒の特性に合った就労先」を目指し進路指導を行う必要があると思います。

●これからの課題と展望

自立支援コースが設置されてから15年目を迎え、貝塚高校では「ともに学びともに育つ」土壌が十分に醸成されてきたと感じています。それは、地域の中でともに育ってきた小中学校での学びが、自然な形で高校へも繋がっているひとつの理想の姿のようにも見えます。この自然な流れを途切れさせずに、就労や社会参加という次のステップに繋いでいくことが支援教育という大きな流れの中での高校の役割ではないかと思います。

校内の課題は「個人内絶対評価」や「個別の指導計画の活用」「ライフデザインのカリキュラム」など細かいものも含めれば枚挙にいとまがありません。ただ、この細かい課題に目がいくようになったのも、土台の部分である校内体制が整ってきたことの裏返しなのではないでしょうか。

ただ、この15年という節目だからこそ、もう一度「ともに学びともに育つ」という原点に立ち返る必要もあるとも感じています。制度が成熟するにつれて、いつの間にか当初の思いや考えといったソフトの面が抜け落ちてしまい、ハードだけが残ってしまうという状況は、支援教育に関わらずよく耳にします。「ともに学ぶ」とはどういうことなのか「ともに育つ」ためには何が必要なのか、ということをもう一度学校全体で考えることができれば、自立支援コースの、ひいては貝塚高校のさらなる成長につながると強く思います。

10年後、90周年の時に貝高生がどのような形で「ともに学びともに育って」いるのかを楽しみに、今日も目の前の仕事に邁進したいと思います。

サマースクールで記念写真

人権文化発表交流会を終えて

職場実習